

No.J2222

『近代中国の国家主義（ナショナリズム）と軍国主義（ミリタリズム）』の出版

京都大学大学院人間・環境学研究科准教授

小野寺 史郎

本書『近代中国の国家主義（ナショナリズム）と軍国主義（ミリタリズム）』は、2022年度「公益財団法人りそなアジア・オセアニア財団出版助成」を受けて出版されたものである。

中国では清末以来の近代国家建設の試みの中で、知識人たちが、国民と国家、社会と軍隊、民衆と知識人の関係はいかにあるべきかをめぐり論争を繰り返してきた。1920年代に、ロシア共産党とソ連をモデルとした中国国民党・中国共産党と国民政府、赤軍をモデルとした国民革命軍が成立したが、これはこの論争の一つの帰結と言える。この政党国家体制と党軍という仕組みは、現在の中華人民共和国と中国人民解放軍にまで引き継がれている。

そこで本書では、主に清末から1920年代にかけて中国知識人の間で展開された国家と軍事、知識人と民衆をめぐるさまざまな議論に立ち戻り、そこで何が問題となったのか、当時の中国をめぐる国内的・国際的条件が彼らの議論をどのように規定していたのか、そしてそれらの議論がどのように政党国家体制と党軍につながっていったのかを検討した。

その結果、本書は近代中国の知識人たちの議論の特徴として、軍事と平和の問題が「国民性」や文明論の問題として語られる傾向が強かったこと、「優勝劣敗」の世界における中国の存続を最大の課題とした中国知識人の中には、何らかの思想や宗教を背景とした絶対的非戦論は少なかったことなどを指摘した。また、この時期の中国知識人の議論は総じて、「感情」よりも「理性」、「野蛮」よりも「文明」を愛好し、「上からの指導」を重視する傾向が強かったことを指摘した。ただこうした暴力的手段の肯定か平和の重視かをめぐる揺れ、上からの「理性」に基づく指導か下からの「感情」に基づく自発性かをめぐる緊張は、以後も解消されることなく存続し、現在にまでつながるものと考えられる。

以上のような本書の考察が、中国の近代と現在を理解するための一助となれば幸いである。